

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	長谷川 奏
論文題目	エジプト古代末期社会の終焉とイスラーム文化の形成 —赤色光沢土器を中心とする生活雑器と空間構成の移相—
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、ナイル川下流域に位置するエジプト地域において、古代末期から初期イスラーム時代に至る多神教からキリスト教、さらにはイスラームへと宗教が変容する時代の文化の継承と形成の問題を赤色光沢土器という生活雑器を用い物質文化の視点から論じたものである。従来、こうした文化の継承や形成などの問題の解明には、科学史や哲学史などの領域からのアプローチが主体であり、物質文化という視点を通して考察した例は、ほとんど存在していなかった。本論文では、当該期のエジプトの複数の考古遺跡から出土する赤色光沢土器という生活雑器に焦点を当て、それを詳細に分析・検討することで、初期イスラーム時代に至る文化の継承と形成の問題を再検討している点が評価に値するものである。</p> <p>「第Ⅰ章 エジプト物質文化の史的背景」では、本論文で対象とする時代である古代末期から初期イスラーム時代を概観している。具体的には、末期王朝・第 26 王朝の開始の時期である前 7 世紀からイスラーム固有の文化が開花・発展する 12 世紀までの、1900 年ほどの極めて長い期間を対象としている。</p> <p>「第Ⅱ章 エジプト古代末期～初期イスラーム時代の生活文化と土器群」では、エジプトにおける当該期(古代末期から初期イスラーム時代)の分析を実施するにあたり 3 つの遺跡を抽出し、それらから出土する生活雑器、および土器群の詳細な分析を実施している。抽出された 3 つの遺跡とは、エジプト南部ルクソール西岸に位置するマルカタ南遺跡・神殿周域住居址(後 1～3 世紀末)、同マルカタ南遺跡・神殿井戸址(5～7 世紀半ば)、そしてカイロ南郊のフスタート遺跡(7 世紀半ば～10 世紀)の 3 つである。これら 3 遺跡は、それぞれ、伝統的な多神教世界の残存する時代(マルカタ南遺跡・神殿周域住居址)、キリスト教(コプト教)の時代(マルカタ南遺跡・神殿井戸址)、そしてイスラームの定着する時代(フスタート遺跡)にあたっている。</p> <p>「第Ⅲ章 赤色光沢土器の系譜とその周辺」では、第Ⅱ章であげた 3 遺跡の資料だけでは把握できない赤色光沢土器の主要な土器群の様相をまとめている。政治的中心がローマ帝国に移行した後も、赤色光沢土器が生活雑器の中で占める役割や交易品としての品質の高さは保持され、帝政初期(後 1～2 世紀)のテッラ・シギラータ土器や、後 2 世紀頃から北アフリカ属州で生産された赤色光沢土器が徐々にその分布域を広げていき、その後、ビザンツ時代には器形や装飾が簡素になり量産化されていく傾向を明らかにしている。ヘレニズム時代末期に既に独自の赤色光沢土器(エジプト赤色光沢土器)を生みだしていたエジプト地域においても、環地中海圏の動向を受けて、赤色光沢土器の生産が活発化していった様相をまとめている。</p> <p>「第Ⅳ章 古代末期における地域的生活空間の展開」では、古代末期のエジプトの生活雑器の生産・流通・消費の問題を当該期のエジプトの主要拠点であるナイル・デルタ西部、メンフィス、テーベの 3 ヶ所を事例として分析し、以下のことを明らかにしている。①ナイル・デルタ西部では、末期王朝・第 26 王朝時代にギリシア植民市が設置され、地中海沿岸とメンフィスを結ぶ流通の幹線ルートを形成した。このルートを中心として環地中海圏のモノとヒトが運ばれていった。その後、この流通ネットワークは、ヘレニズム期の政権(プトレマイオス朝)下でアレクサンドリアとメンフィスを直結するルートに置き換わる。一方、さまざまな地域で、エジプト固有の多神教時代のネットワークがキリスト教時代のネットワークに受け継がれていくことが明らかにされた。②古代の行政・宗教の中心拠点であったメンフィスでは、プタハ神殿に併設された工房が顕著な生産活動の様相を示しており、巨大神殿の保護の下で工人たちの生産活動がおこなわれていたが、後 4 世紀のキリスト教世界の形成により消滅し、生産の拠点は砂漠縁辺部に設けられたキリスト教修道院へと移動していく。③エジプト南部のテーベでは、ファラオ時代からキリスト教時代への移行期に、長期に存続した王朝期の伝統が廃絶し、生活雑器の</p>	

セットも、ファラオ時代からの伝統が地中海的な雑器のセットへと転換した時期であった。また、生活雑器の消費ネットワークにおいても、テーベ西岸の都市域と砂漠縁辺部の修道院とが密接に結びついていたと推測された。その一方で、ローマ・ビザンツ帝国時代を通じて、宗教の変遷に関わりなく、食卓器から調理器、貯蔵器などにおいて環地中海圏に共通する生活スタイルが保持された。

「第Ⅴ章 イスラーム文化形成へのプロセス」では、フスタート遺跡出土資料から赤色光沢土器とその周囲の土器群からなる生活雑器が、イスラームの侵入・支配後に、どのように変質するかを分析している。エジプト赤色光沢土器(あるいはアスワーン土器)は、初期イスラーム時代にまで存続していくが、第Ⅰ期(650～900年)の後半(750～900年)に変化の兆しが現れ、赤色光沢土器にヌビア系の彩文土器のカップなどが登場する。また、この時期に施釉陶器(鉛釉陶器)が登場したと考えられる。9世紀に入ると、初期の鉛釉陶器は、多彩釉陶器、白釉陶器、初期のラスター陶器などとともに生活雑器のセットを構成するようになる。また、9世紀後半には、中国からの影響を強く受けた陶器もエジプトに流入してくる。第Ⅱ期(900～1000/1100)には、赤色光沢土器から環地中海的な特徴が消滅し、アスワーンの工房で作られた土器群に、古典期キリスト教ヌビア地域の影響が強く現れる。この時期を代表するファーティマ朝時代においては、高い完成度を持つラスター彩陶器、錫を用いた白釉陶器・青釉陶器が登場し、南北朝時代から宋代にかけての白磁や青磁が多量に招来し、生活雑器をめぐる世界は大きく変貌を遂げていったことを明らかにしている。

本論文は、前述したように前7世紀から後12世紀までの1900年に近い極めて長い時代を対象として扱い、ナイル川下流域のエジプトにおける古代末期からヘレニズム時代を経て、初期イスラーム時代に至る社会や文化の大きな変化を宗教的な画期や歴史的事件、あるいは文化史的要素などではなく、そこに居住していた人々が日常使用していた生活雑器(赤色光沢土器)を詳細に分析することで、物質文化から見た社会や文化の変遷・画期を明らかにしようとした従来にはなかった研究手法を使用している点が高く評価できる。

さらに、第Ⅱ章で分析対象として取り上げた3遺跡は、いずれも日本の調査隊による発掘調査によって明らかにされた(早稲田大学によるマルカタ南遺跡調査、早稲田大学・出光美術館・中近東文化センターによるフスタート遺跡調査)ものであり、論文提出者も両遺跡の調査に実際に参加しており、その成果を十二分に活用できた意義は大きい。これまで、古代エジプトの研究の主体が、王朝時代(すなわちファラオが支配した時代)を中心として展開される傾向が強く、王朝時代で完結する研究が大部分を占めていたが、本研究は古代末期から初期イスラーム時代に至る複数の異なる巨大な政治・宗教システム下で、生活雑器という物質文化がどのように変容していったのかを様々なアプローチを通して考察した意欲的な考察である。イスラーム初期の物質文化には、地中海的伝統が色濃く残存していたが、時代経過とともに次第にそうした要素が薄れ、イスラーム施釉陶器に見られるような新たなイスラームの物質文化が誕生するプロセスにも光を当てた研究となっており、多くの問題提起を含んだ優れた論考として認められる。

以上のように本論文は、古代末期からイスラーム初期に至る環地中海圏の物質文化研究にとって、新たな地平を開く論考であると認められる。よって、審査委員会は、本論文が「博士(文学)」の学位にふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2016年7月15日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	近藤 二郎	エジプト学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 龍三郎	考古学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大稔 哲也	中東社会史	博士(文学)東京大学
審査委員	近畿大学文芸学部・教授	高宮 いづみ	エジプト考古学	